日本小児がん看護学会
Japanese Society of Pediatric Oncology Nursing
— JSPON —
News Letter

Vol.9 May 2009

日本小児がん看護研究会が 2003 年に発足し、7 年が経過しました。2008 年 11 月 15 日、役員会、理事会および総会での合意を得て、「日本小児がん看護学会」と名称を変更いたしました。小児がん看護の実践と教育・研究の更なる向上・発展を目指して活動していきたいと思いますので、会員の皆様の積極的な参加をよろしくお願い致します。

また、2009 年５月１日に、無事にＮＰＯ法人日本小児がん看護学会として認証を受けたことをここに報告させていただきます。尚、NPO 法人の定款は、改めて会員の皆様に送付する予定です。

今回のニュースレター第９号では、第７回日本小児がん看護学会のお知らせと、第６回日本小児がん看護研究会の報告をいたします。

第７回日本小児がん看護学会のお知らせ

第７回日本小児がん看護学会は、昨年同様に日本小児血液学会、日本小児がん学会、小児がんの子供を守る会とともに開催いたします。これまでの大会テーマのトータルケアという言葉を頂き、「10 代患者のトータルケア」を看護学会独自のサブテーマとしました。10 代患者に関する問題を整理し、成人を見据えた看護を展開するための指針を参加者の皆様と共に作り上げたいと考えております。がんの子どものケアに携わる皆さま、教育の現場の方々などさまざまな領域の方と意見交換を行い、今後のケアへ活かせる学会にできればと考えております。

多くの皆さまの、ご参加をお待ちしております。

（第７回小児がん看護学会　会長　丸　光惠）

記

会　期：２００９年１１月２８日（土）２９日（日）
場　所：東京ベイホテル東急
全体テーマ：
　　君の笑顔　みんなの夢　Your Smile, Our Dream
看護学会テーマ：１０代患者のトータルケア
演題募集期間：５月１２日（火）～６月１６日（火）
HP：http://www.congre.co.jp/jsph-jspo2009

以上

第６回小児がん看護研究会の報告

去る平成 20 年 11 月 15 日（土）から 16 日（日）に、千葉県幕張メッセ国際会議場において「第６回日本小児がん看護研究会」を開催いたしました。第 24 回日本小児がん学会と第 50 回日本小児血液学会との同時期開催で行い、全体参加者は 1899 名で、そのうち看護関係の参加者は約 700 名でした。

「トータルケアの原点に戻る－先端医学と医療の融合－」をメインテーマとし、教育講演では、押川真喜子氏に「家族とともに過ごす時間－在宅ケアの実際－」について、保坂隆氏に「小児のエンドオブライフに関わるスタッフのソーシャルサポート」についてのご講演をいただきました。

一般演題の口演発表では、22 演題の発表があり、ポスター発表では、14 演題の発表がありました。

また、今回の研究会では、各施設の皆様との意見交換を行うことを目的に、「1.きょうだいへの支援」「2．感染管理」「3．復学支援」の３つのワークショップを企画しました。

ワークショップでは、臨床現場で働く看護師のみならず、医師の参加も多く、日々の看護ケアおよび業務に関連した活発な意見交換がなされました。

また、今回をもって「日本小児がん看護研究会」としての開催は最後となり、次回より「日本小児がん看護学会」となることが今回の総会において承認されました。

開催担当の施設が、急性期総合病院の中の小児病棟であり、約１年間の準備期間中、日々の仕事をしながら研究会の企画、運営を行うことは非常に大変でしたが、得たものは大きく、大変勉強になりました。また、小児がん看護研究会の役員の皆様、事務局のみなさま、また同時期開催の小児血液学会大会長の土田昌宏先生、小児がん学会大会長の細谷亮太先生、事務局を務められた真部淳先生、がんの子供を守る会の皆様から、多大なるご支援をいただき感謝しております。

おしらせ

第６回小児がん看護研修会

夏の恒例となりました、小児がん看護研修会のお知らせをいたします。昨年のアンケート結果に基づき、グリーフケアについて皆様と一緒に考えたいと思います。プログラムは、午前中に教育講演を２つ、午後のシンポジウムでは、子どもへのグリーフケア、親へのグリーフケアに加えて、スタッフのグリーフケアについても考えたいと思います。詳細につきましては６月初旬に別送いたします。

記

テーマ：小児がん看護におけるグリーフケアを考える
日時：2009 年８月 29 日（土）　9:30～16:30
場所：成育医療センター
講演１「(仮) 家族へのグリーフケアについて」
慶応義塾大学　　才木ｸﾞﾚｲｸﾞﾋﾙ滋子先生
講演２「(仮) 子どもの死の概念の発達」
聖隷三方原病院　天野功二先生
シンポジウム
(仮) 小児がん看護におけるグリーフケア」

以上

SIOP2009 へのお誘い

今年の国際小児がん学会（41th International Paedeiatric Oncology Conference)は、10月５日(月)から９日（金）ブラジル、サンパウロで開催されます。世界各国からのナースたちが看護実践を報告、小児がん看護における教育や研究についても発表し、意見交換を行います。教育講演、医師との合同セッション、当事者や親の会との合同セッションも計画されます。イグアスの滝見学を含むＡコースは、10 月２日（金）成田発、学会参加のみのＢコースは 10 月５日（月）成田発で、いずれも 12 日（月）午後成田着の２コースを計画中です。個人的な希望も含めて、お問い合わせ、お申し込みはグロリアツーリストへご連絡ください。

TEL：03-5641-1225,1201、FAX: 03-5641-1223
E-mail: uda@gloria-tourist.co.jp　担当：渡辺（敏彦）、宇田

なお、***第 42 回大会は、2010 年 10 月 21 日(木)～24 日（日）ボストン***で開催されまる予定です。

第8回日本小児がん看護学会
期日：2010年12月18日（土）19日（日）
会場：大阪国際会議場
会長：藤原千恵子（大阪大学大学院医学系研究科）

Cancer Nursing購読
：日本小児がん看護学会　会員優待のお知らせ

本学会にご貢献くださっている Dr. Pamela Hinds のご尽力により、本学会会員は、CANCER NURSING An International Journal for Cancer Nursing（Lippincott, Williams & Wilkins）を格安で入手できます。詳細につきましては、研究会ホームページをご覧下さい。

研究会ホームページアドレス
http://jspon.sakura.ne.jp/

平成２１年度　役員名簿

理事長：梶山
副理事長：丸、門倉
庶務：内田
会計：石川
広報（機関誌・ホームページ）
　：富岡、前田、小川、小原
監事：石橋、吉川
編集委員会：森、野中、米山
研究委員会：内田、小原、塩飽、丸
教育委員会：梶山、浅田、竹之内、小川
将来計画委員会（NPO法人化、事業展開）
　：丸、塩飽、前田、梶山、門倉
国際交流委員会：丸、梶山
第7回学術集会プログラム委員会：小原、丸
第8回学術集会プログラム委員会：小原、門倉
事務局：長野県看護大学　白井、足立、大脇

日本小児がん看護研究会機関誌担当

淑徳大学看護学部　小児看護学　小川純子
千葉県こども病院　看護部　小原美江

［連絡先］
〒260-8703 千葉市中央区仁戸名町 673
E-mail：junogawa@soc.shukutoku.ac.jp
（小川）

小児がんの治癒率の向上により、小児がん経験者の長期フォローアップについての取り組みも行われるようになり、小児がん看護に携わる看護師の役割も拡大し、今後さらに重要となってきます。「日本小児がん看護学会」となることにより、さらに学術的にもレベルアップしていくことを期待いたします。

（第６回小児がん看護研究会　会長　吉川　久美子）

［プログラム］

平成２０年１１月１５日（土）

教　育　講　演

教育講演１

家族と共に過ごす時間―在宅ケアの実際―

押川真喜子(聖路加国際病院訪問看護ステーション)

教育講演２

小児のエンドオブライフケアに関わるスタッフのソーシャルサポート　　保坂隆（東海大学医学部）

一　般　演　題

口演発表　疼痛ケア

看護師がとらえた小児がんの子どものがん性疼痛の評価と緩和ケアの効果	神奈川県立こども医療センター 飛山　歩美
看護師が捉えた造血幹細胞移植を受ける小児がんの子どもの痛みの評価方法と緩和ケアに関する検討	神奈川県立こども医療センター 宮川　育子
ペーパーペーシェントを用いた医師・看護師の疼痛判断の傾向	日本赤十字秋田短期大学 奥山　朝子

口演発表　終末期ケア

小児がん患者の終末期看護を振り返る―家族で過ごす時間を重視し、在宅へ移行できた事例より―	山口大学医学部附属病院 安本寿美江
医療従事者のグリーフケアについての検討	聖路加国際病院 山本　光映
小児終末期における看護職の充実感の要因	新潟県立がんセンター新潟病院 金子　真紀
同病児の死を体験した患児対するグリーフケア	聖路加国際病院 石井　里奈

口演発表　看護師への教育支援

病状説明時に同席した看護師の役割達成度の変化　行動マニュアルを活用して	自治医科大学附属病院とちぎ子ども医療センター 森本　久美子
抗がん剤の職業暴露防止に対する指導・教育の有用性―勉強会前後のアンケートをもとに―	静岡県立こども病院 内科系幼児学童病棟 加藤　由香
「小児がん看護ケアガイドライン（第一試案）」から「小児がん看護ケアガイドライン 2008 への検討経過」	長野県看護大学 内田　雅代

口演発表　看護ケアとチーム医療

高度精神発達遅滞を伴う自閉症患児に対するがん化学療法における看護	九州大学病院 末次　晶子
入院している小児がんの子どもの治療への主体性を促す援助に関する看護師の認識	淑徳大学 小川　純子
放射線治療における継続的なプリパレーションの意義【脳部分照射を受ける幼児の事例検討を通して】	国立がんセンター中央病院 川渕　沙織
放射線治療を受ける子どもと家族を支えるチーム連携	千葉県こども病院 萱野さと美

口演発表　家族に関するケア

白血病を発症した児童養護施設児の看護を通して	神戸市医療センター中央市民病院 藤田　真代
白血病で入院した幼児の遊びに対する母親の認識―2 事例のインタビューより―	東京医科歯科大学大学院　保健衛生学研究科 松村　三智
「茶話会」の内容からみる入院患児の家族の思い―病棟を円滑に運営するには・・・―	聖路加国際病院 吉川久美子
患児に付き添う家族の不安解消へのプログラム作り―当事者同志がつながるためのプログラム作り―	北海道大学病院 早坂　瑞樹

ポスター発表

ポスター　食事

化学療法を受けている小児がんの子どもの消化器症状マネジメント	横浜市立大学 永田　真弓
当科にて化学療法を受ける患児への食事指導においての問題と食品パンフレットの作成	群馬大学付属病院 新保　伯枝
放射線化学療法中経口摂取しなくなった 7 か月児の一例	国立病院機構岡山医療センター 辻野まどか
化学療法を受けている小児がんの子どもの食事と栄養管理	横浜市立大学 勝川　由美
化学療法を受けている小児がんの子どもの食事環境	目白大学 松田　葉子

ポスター　終末期ケア・感染管理

子どもが終末期と告げられた後の母親の言動とその意味	昭和大学藤が丘病院 鈴木　美穂
ターミナル期における子ども・家族に対する看護の実際【音楽療法を取り入れた事例を通して】	熊本大学医学部附属病院 磧本　尚子
多職種の連携による小児がん・免疫不全患者の病棟管理	聖マリアンナ医科大学病院 各務綾希子
当院小児病棟における感染予防のための取り組み	杏林大学医学部附属病院 駒沢　祐太
末梢穿刺中心静脈カテーテル導入後の現状報告	長野県立こども病院 佐々木　葉子

ポスター　看護ケア

小児同胞ドナーの権利擁護と QOL 向上に向けた支援の検討	茨木県立こども病院 関野　晴美
造血幹細胞移植の際のクリーンルームへの転床に伴う問題点の検討―子どもと家族を中心とした連携に向けて―	東京慈恵会医科大学附属病院 追原　早苗
白血病患児の母親が治癒過程の中で心に残った看護援助	岡山大学病院 岩佐　真奈美
幼児期の患児・家族への内服援助―アンケート結果と３事例を通して―	名古屋第二赤十字病院 上野　里恵

ワークショップ

ワークショップ１　きょうだいへの支援

小児の母親付添入院が同胞に及ぼす影響と家族の対応	大阪大学医学部附属病院　手取屋智未
自宅より離れた場所で治療を受ける患児のきょうだいへの病気についての説明	静岡県立静岡がんセンター 松山　円
当病棟におけるきょうだいの面会の再検討	杏林大学医学部附属病院 忍足　香澄
きょうだいの支援についての現状と課題	千葉県こども病院 川島　幸

ワークショップ２　感染管理

小児の混合病棟における感染管理対策＜ウィルスとの苦闘＞	防衛医科大学校病院 掘下　理加
サーベイランスを活用した皮下トンネル型カテーテル挿入患者の入浴方法の検討	聖路加国際病院 永瀬　恭子
感染予防のための病棟運営	自治医科大学附属とちぎ子ども医療センター 安西　典子

平成２０年１１月１６日（日）

公開合同シンポジウム

治すのが難しくなったら・・・(残された難治性)

一　般　口　演

口演発表　学童・思春期のケア

思春期にある血液・腫瘍疾患患者の入院中の対処とサポート感	千葉大学医学部附属病院 渡邉　朋
白血病維持療法中の学童・思春期の患者が疾患を持ちながら生活する姿勢に影響する要因	千葉大学看護学部 沖　奈津子
化学療法を受けている思春期の子どもの看護＜発達段階に応じた心の変化を捉えた関わり＞	富士重工業健康保険組合　総合太田病院 佐々木美香
再入院を繰り返す小児の入院前から化学療法後におけるストレス経過分析	山口大学医学部附属病院看護部 林　久美

ワークショップ

ワークショップ３　復学への支援

小児がん患児における復学支援―看護師が友達の大切さの授業を行って―	三重大学医学部付属病院 川瀬　梓
保護者の思いを受けとめながらの復学支援―原籍校への復学を選択しなかった事例報告	東京都立墨東特別支援学校 川田　悌也
小児がん患児の当院における復学支援の現状と課題＜思春期の患児・家族との関わりを通して＞	静岡県立静岡がんセンター 高橋　亜矢

ゴールドリボン研究に関する報告

平成 20 年度　小児がんの子供を守る会・ゴールドリボン基金研究助成課題「エビデンスある小児がん看護実践を促進するための基礎的調査」　報告者

丸　光恵　内田雅代　野中淳子　小川純子　富岡晶子　桜井美和

日本小児白血病リンパ腫研究グループの参加施設等の 204 病院に対して症状（感染、口内炎、痛み、便秘・下痢、睡眠障害、倦怠感等）マネージメントの実態調査を行い、70 施設（有効回答数 34.3%）より回答を得ました。カテーテルケアも感染予防の観点から、消毒方法等についての回答を求めました。

文章化されたガイドラインまたはマニュアル等が最も充実していたものは、ライン交換頻度（70.0%）、CV カテーテル等の刺入部に関する消毒方法（55.7％）、定期消毒（57.1%）、など CV カテーテルのケアに関するものでした。症状のアセスメント指標があると回答したものは口内炎と、がん性疼痛（各 16 名；22.9％）が多く、つづいて、痛み（8.6%）でした。しかし WHO の口内炎診断基準を採用していると回答した者は 2 名（2.9%）、NCI-CTC（米国国立がん研究所 Ver2.0 JCOG 腫瘍学グループ日本語版）は1名のみで独自のものを使用しているようでした。一方便秘・下痢、睡眠障害、倦怠感についてはマニュアルやガイドライン等を整備している施設はほとんどなく、標準的に行っている看護内容も観察が中心で、予防や対処方法については個々の看護師の判断によるものと考えられました。さらに、痛みや悪心に対して薬物療法が行われた際に、その効果を観察するための項目や、薬物等の効果を高めるための心理的支援や日常生活上のケアなどについては、実施している項目が少ない傾向にありました。

症状マネージメントのセルフケア教育の方法としては「口頭」としているものが多く、「書面」や「実演」を上回っていました。セルフケア教育の対象は保護者・子どもとしたものが各項目とも最も多く、続いて保護者のみ、子どものみの順であった。今回の調査については協力施設への報告書送付と HP 掲載を予定しています。また小児がん学会でのポスター発表を予定しています。皆様からのご意見をお待ちしております。本研究は日本小児がん看護学会　研究委員会からも補助金を受けて行いました。